

刀 於武州江戸新五郎吉時

金象嵌 玉の緒 寶文七年丁未十月七日

截手 前嶋八郎友次(花押)

武ッ胴截断 (二二六七)

濃州岡住坂尾新五郎吉時 濃州岡住坂尾

善定源吉時 岡善定家坂尾吉時作 於武

州新石町作 武藏 寶文

善定。坂尾新五郎。

本國美濃國、江戸新石町住。

寶文から天和までの作がある。

二代吉時は元禄。三代は享保という。

平成二十七年十二月十二日

刃長 69.6cm (二尺三寸九分七厘)

元重 0.80cm (0.71cm)

茎重 2.71cm

鎬造、庵棟尋常鎬中。鎬高は尋常で身中も尋常な造込みとほり、元中に比較して先中は傾合、切先は中切先が延び

かげんでフフフは尋常、反りの中向反りが浅めでヤヤ腰反りを加えた刀姿となる。地鉄は小板目に空目と板目を

交じえて所々板目が流れ、ヤヤ肌立ちかげんに地沸がつき、肌に乗って地景が表われ、白ケ映りに乱れ映りが鮮やかに

立つ。刃文は湾れに互の目、区際から物打までは焼中を押さえ、物打から先は互の目を高く大きく焼く。帽子は浅く湾れて金助

刃中は足がよく入り、物打辺りは長く金助・砂流しを交じえる。匂は深く沸がよくつく。茎は生ぶ、鎬中・鎬高は尋常、肉は少なく、

・砂流し交じり、表の先と返りは掃げ、裏は小丸に短かく返る。長寸で先は入山形が深い、刃角は棟角、鏡目は鷹羽、目釘完は二で上の穴は大きい。

銘は製作地・俗名・作者を鎬筋にかがりながら鎬地に長銘を切り、裏は金象嵌の截断名を

(玉の緒とはこの刀の号であろうか) 茎は、ばい、に切る。



鑑定刀

反り 1.81cm (六分)

先重 0.53cm (0.48cm)

茎先重 1.64cm

元中 3.13cm (2.99cm)

切先長 3.11cm

茎先重 0.82cm (0.74cm)

茎先重 0.36cm (0.34cm)

先中 1.94cm (1.73cm)

茎長 21.5cm (22.2cm)

茎反り わずか

おの流

寛文七年丁未十月七日

武ッ胴截断

截手

前嶋八郎友次

於武州江戸新五郎吉時

刀 陸奥守包保

金象嵌 實文三年二月九日

山野加右衛門永久(花押)

貳ツ胴截断 (二六六三)

「攝州大坂住陸奥守包重」「陸奥守包重」

「陸奥大塚包保」「陸奥守包保」「包保」

團丸太夫。生国丹波。

左陸奥包保内人で後に養子となる。

初銘包重、二の頃は師と同じ逆文字に

切るが、包保を襲名すると右文字に改める

(右陸奥と呼ばれる)。信州松本にても造る。

包重と切った作の鑑目は逆筋違にて「包保と切

る場合は筋違い。いずれも磨出しは切が勝手下り。

平成二十七年十二月十二日

刃長 69.1cm (二尺二寸八分)

元重 0.80cm (0.77cm)

茎帯 2.85cm

鎬造、庵棟尋常、鎬巾は尋常で鎬は低く、

力強い實文の新刀姿。

添って地景が鮮やかに表われた、明るく

焼中を広め、手元は刃よりの流れた板目に

焼く、匂口は締りがけんになる。

狭めで鎬は低く、先の身中を細めて浅い刃

勝手下り、裏はわずかに刃よりに切鑑が

目釘元は二、下の元は鉛埋。銘は大きく

裏は金象嵌截断銘を切る。地刃健全、

鑑定刀

反り 1.49cm (四分九厘)

先重 0.52cm (0.52cm)

茎帯 1.27cm

鎬造、庵棟尋常、鎬巾は尋常で鎬は低く、

力強い實文の新刀姿。

添って地景が鮮やかに表われた、明るく

焼中を広め、手元は刃よりの流れた板目に

焼く、匂口は締りがけんになる。

狭めで鎬は低く、先の身中を細めて浅い刃

勝手下り、裏はわずかに刃よりに切鑑が

目釘元は二、下の元は鉛埋。銘は大きく

裏は金象嵌截断銘を切る。地刃健全、

元中 3.33cm (3.20cm)

切先長 3.56cm

茎元重 0.82cm (0.79cm)

鎬造、庵棟尋常、鎬巾は尋常で鎬は低く、

力強い實文の新刀姿。

添って地景が鮮やかに表われた、明るく

焼中を広め、手元は刃よりの流れた板目に

焼く、匂口は締りがけんになる。

狭めで鎬は低く、先の身中を細めて浅い刃

勝手下り、裏はわずかに刃よりに切鑑が

目釘元は二、下の元は鉛埋。銘は大きく

裏は金象嵌截断銘を切る。地刃健全、

先中 2.31cm (2.16cm)

茎長 18.5cm (18.8cm)

茎先重 0.34cm (0.34cm)

鎬造、庵棟尋常、鎬巾は尋常で鎬は低く、

力強い實文の新刀姿。

添って地景が鮮やかに表われた、明るく

焼中を広め、手元は刃よりの流れた板目に

焼く、匂口は締りがけんになる。

狭めで鎬は低く、先の身中を細めて浅い刃

勝手下り、裏はわずかに刃よりに切鑑が

目釘元は二、下の元は鉛埋。銘は大きく

裏は金象嵌截断銘を切る。地刃健全、

茎反り わずか

鑑目は化粧鏡、表の磨出しは

茎は生ふ、鎬巾は

添って地景が鮮やかに表われた、明るく

焼中を広め、手元は刃よりの流れた板目に

焼く、匂口は締りがけんになる。

狭めで鎬は低く、先の身中を細めて浅い刃

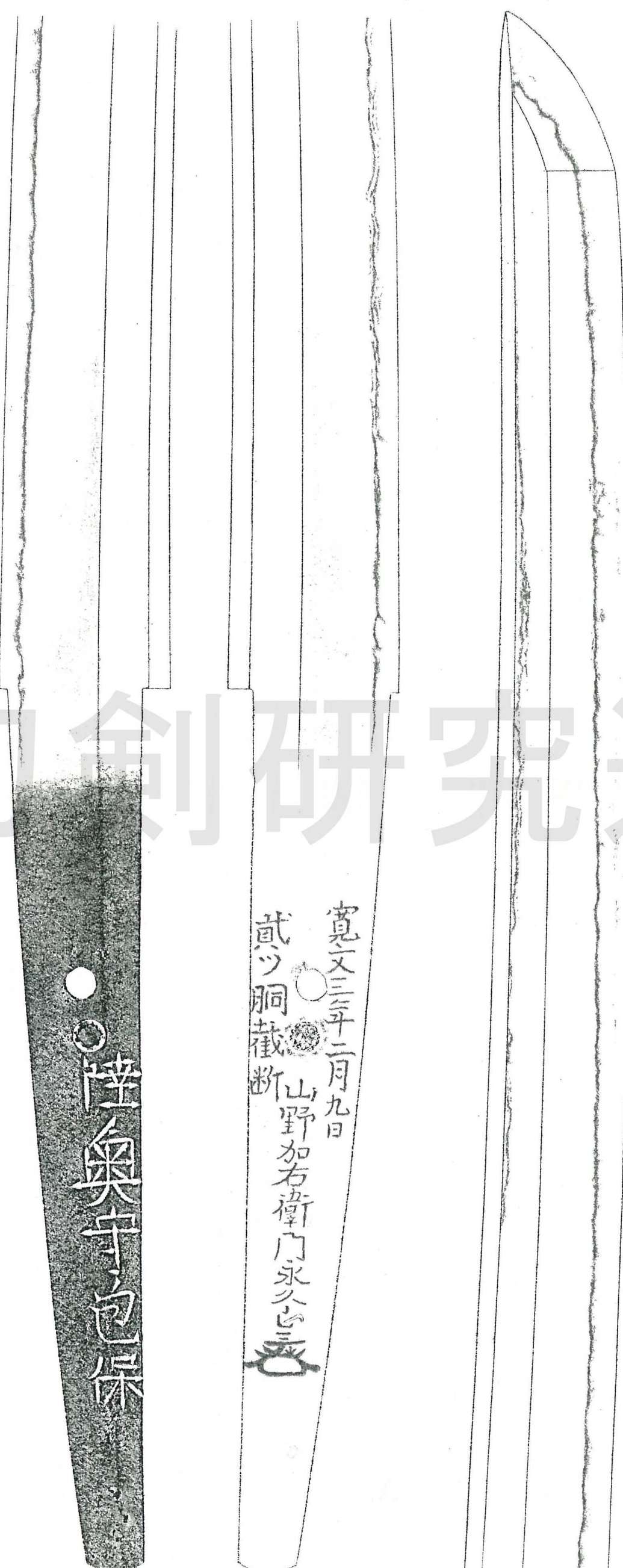
勝手下り、裏はわずかに刃よりに切鑑が

目釘元は二、下の元は鉛埋。銘は大きく

裏は金象嵌截断銘を切る。地刃健全、

裏は金象嵌截断銘を切る。地刃健全、

裏は金象嵌截断銘を切る。地刃健全、



寛文三年二月九日

貳ツ胴截断

山野加右衛門永久

陸奥守包保

刀 備前国住長船勝光同治光

永正十一年八月吉日 (一五四)

備前 永正

○勝光は初めに二郎左衛門尉、永正の始め頃より次郎左衛門尉と切る。叔父左京進宗光、与三左衛門尉祐定、子の次郎左衛門尉治光との合作がある。
大業物。

○治光、次郎兵衛。

次郎左衛門尉勝光の二男、十郎左衛門尉春光の兄、または親ともいう。

永正六年より享祿五年頃までの作刀を見る。良業物。

平成二十七年十一月二十七日

第十二回大会 鑑定刀

刃長 67.6cm (二尺二寸三分二厘)

元重 0.75cm (0.67cm)

茎元中 2.58cm (2.57cm)

反り 0.21cm (六分六厘)

先重 0.39cm (0.33cm)

茎先中 2.09cm

元中 2.91cm (2.80cm)

切先長 3.03cm

茎元重 0.82cm (0.75cm)

茎長 13.1cm (13.6cm)

茎先重 0.46cm (0.42cm)

先中 1.74cm (1.66cm)

茎反り わずか

鑄造、庵棟尋常、鎬中は狭めて鎬高は尋常、重ねは尋常で身中はやや細めの造込オとなり、元中に比較して先中をやや狭め、切先は中切先でフクラは枯れる。反りは中向反りが高めて先反りを加えた、茎の短かい片手打の姿となる。地鉄は板目に杢目を交じえて肌立ち、鎬地も同様、地沸は細かく厚くつき、地景は肌につけてよく表われている。映りは鎬筋の近くに淡く表われる。
刃文は直刃、互の目と丁字を交じえ、刃縁は肌につけて喰違ひ、打のけが交じり、刃中は足葉よく入り、金筋砂流しを交じえる。匂は深めで明るく冴え、小沸がよくつく。
帽子は直刃、先は尖りかげんの小丸でやや掃け、返りは乱れて長く返る。 茎は生ぶ、鎬中と鎬高は尋常、太く短かい茎で、先は刃上り栗尻、刃角小肉、棟 区近くは丸、その下は角、鑢目は勝手下り、目釘穴は大きく一、銘は親子合作の銘を表に、裏は製作年紀を鎬地に切る。
生ぶ茎・片手打の姿が良く、よく練れた鍛の良、地鉄に、小沸出来の冴えて明るい直刃を焼く、親子の合作は資料としても貴重。



備前国住長船勝光同治光

永正十一年八月吉日

脇差 越前守助廣

「撰州住藤原助廣」「越前守助廣」

「越前守助廣於大阪を不路」

「越前守源助廣」「撰州越前守助廣」

「津田越前守助廣」「助廣」

撰津 實文

津田甚之丞、撰津常盤住。

實永十四年(一六三七)撰津打出村に生れる。

初代助廣内人となり後に養子。

明暦三年(一六五七)越前守を受領。

實文七年(一六六七)八月から翌年迄を早書で

切り始める。この頃より化粧鏡をかける。

延宝三年(一七二四)から表裏ともに早書体で

銘を切る(九津田)。それ以前は(角津田と

呼ばれる)。天和二年(一六八二)三月十四日

没。四十六歳。

大業物。

平成二十七年十二月十二日

刃長 54.4cm (一尺七寸九分五厘)

元重 0.79cm (0.79cm)

莖元中 2.73cm 莖先中 1.39cm

鍋造、庵棟尋常、鍋巾は尋常で鍋は低く、重ねと身中の尋常は造込みとなり、元中と先中の差は頃合つに南さ切先は

中切先、反りは浅くやや腰反りを加えた、實文新刀の脇差姿。

地鉄は小板目が特によく約所々板目を交じえ、微塵の地沸が厚くつき、細かな地景がよく表われ、鍋地は板目が

目立つ、明るく冴えて濁りのあるサことば地鉄。

刃文は互の目に丁字交じり、区際は燧出しを短かく直刃で燧き、物打辺りは互の目がちとほり、同じ刃が燧返し

燧かかっている。刃中は足・葉よく入り砂流しを交じえる。匂を敷って沸は深く光が強く、明るく冴える。

帽子 浅く冴れかけんに、先は小丸に返る。

莖は生ぶ、鍋巾は尋常で鍋は低く、先を細めて浅く入山形。

棟角小肉 鏡目は筋違、目釘元は一、銘は鍋筋にかけながら鍋地に切る。

本脇差は助廣の初期作、若年にもかかわらす也。刃の牙えと明るさは抜群。

鑑定刀

反り 0.77cm (二分五厘)

先重 0.54cm (0.55cm)

莖元重 0.79cm (0.79cm)

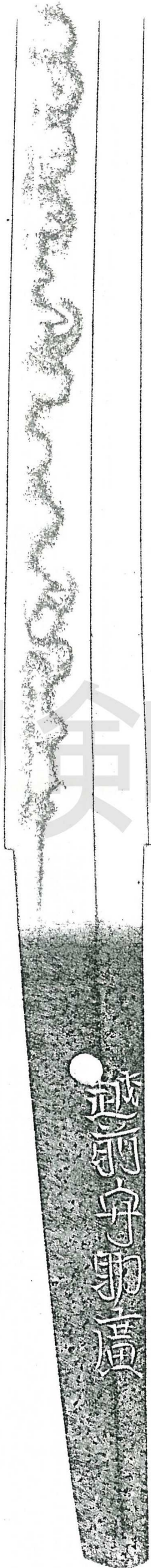
莖先重 0.37cm (0.37cm)

元中 3.13cm (3.00cm)

切先長 3.28cm

莖長 15.0cm (15.3cm)

莖反り 無し



刀剣研究

脇差 岩井歆司信連造

安政六年二月日 (一八五九)

「岩井歆司源信連作」「浪速住岩井歆司
信連作」「橋信連撰陽高城南辺住」

「浪花金城辺住岩井歆司信連作」

「浪速大江岸於橋信連作之」

撰津 慶応

岩井歆司。

栗原信秀内人。

平成二十七年十二月十二日 鑑定刀

刃長 53.2cm (一尺七寸五分五厘)

元重 0.78cm (0.63cm)

茎元中 3.00cm (2.97cm)

鍋造、三ノ棟 棟筋の中は尋常で庵は急

切先は大切先でフクラは張る。反りは中間反りに強く先反りをつけた新々刀期の脇差姿となる。

地鉄は小板目に流れた柱目を交じえてよく約み、細かな地沸がついた、澄んで明る地鉄となる。

刃文は互の目、やや角張る刃が交じり、刃中は長つ足がよく入り(刃先は抜ける)金筋・砂流しを交じえる。匂口は

明るく牙え所々沸がつく。表の中程の錫筋に細長い倦煖がある。帽子 互の目で乱れ込め表の先は小丸に掃げ、裏は

尖って掃げる。彫刻 表に昇龍、裏は護摩箸。

栗原、刃角口 棟小丸 錫目は筋遠い、目釘穴はやや大きく一、銘は長銘を錫地に切る。

地・刃健全、信連快心の一派り。

反り 1.53cm (五分)

先重 0.60cm (0.41cm)

茎先重 1.98cm

切先長 7.43cm

茎元重 0.79cm (0.68cm)

茎長 12.7cm (13.3cm)

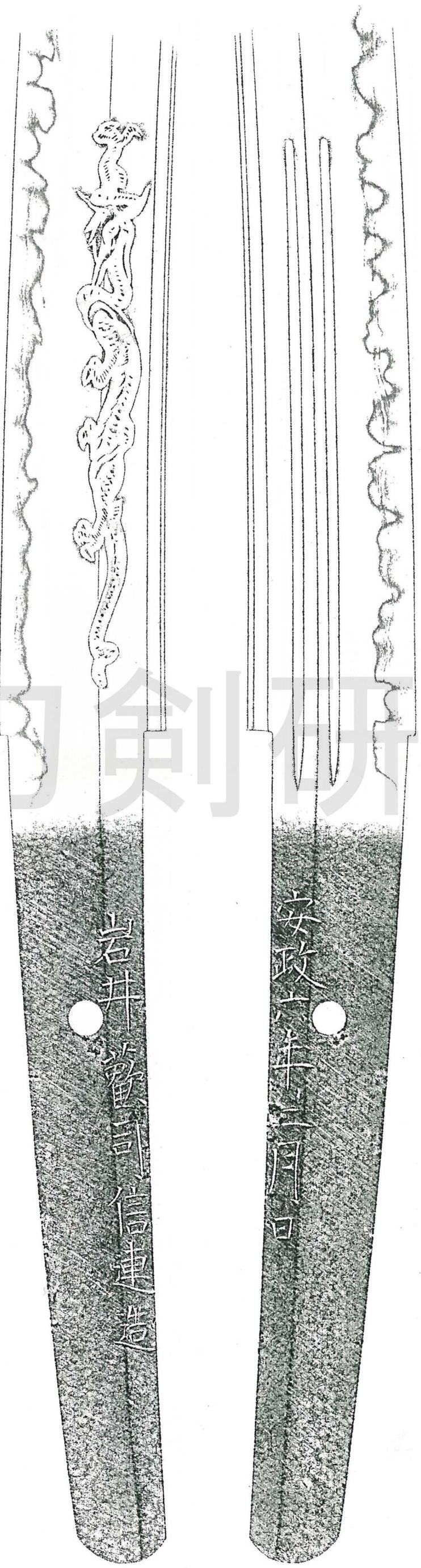
茎先重 0.58cm (0.49cm)

元中 3.35cm (3.21cm)

先中 2.78cm (2.67cm)

先重 0.60cm (0.41cm)

茎先重 1.98cm



安政六年二月日

岩井歆司信連造